

子どもたちの「新たな学びの空間」の 在り方に関する試行的研究Ⅱ ～保護者へのニーズ調査分析～

齋藤陽子, 吉村希至

岐阜女子大学 文化創造学部

(2017年10月1日受理)

Pilot Study on Children's "Space of New Learning" II ~Needs investigation analysis for parents~

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu Japan (〒501-2592)

SAITO Yoko, YOSHIMURA Mreshi

(Received October 1, 2017)

要 旨

女性の社会進出が進み放課後の子どもの安全な居場所・過ごし方の確保が求められている。そこで、子どもの放課後を保障する放課後児童クラブに着目し、そこに新たな付加価値を与え「新たな学びの空間」として子ども達の放課後の過ごし方を拡充することができないかと考えた。そこで、そのニーズや放課後の過ごし方についての実態調査を行ったので、報告する。

〈キーワード〉 女性活躍, 新たな学びの空間, 放課後児童クラブ, 21世紀型能力, ニーズ調査

1. はじめに

少子高齢化が進む中、日本経済の成長を持続していくためには、我が国最大の潜在力である女性の力を最大限発揮し、「女性が輝く社会」を実現するため、安全で安心して児童が過ごすことができる環境を整備することが必要である。

このような観点から、厚生労働省及び文部科学省が連携して検討を進め、平成26年5月の産業競争力会議課題別会合において、両省大臣名により、放課後児童クラブの受皿を拡

大するとともに、一体型を中心とした放課後児童クラブ及び放課後子供教室の計画的な整備を目指す方針を示している。また、平成26年6月24日に閣議決定された「日本再興戦略」改訂2014において、「(略)いわゆる「小1の壁」を打破し、次代を担う人材を育成するため、厚生労働省と文部科学省が共同して「放課後子ども総合プラン」を年次に策定(略)」することとされ、これを踏まえ、「放課後子ども総合プラン」を策定している。

子育てと仕事の両立を支援する少子化対策の面からも、子どもの放課後対策は行政が解

決すべき喫緊の政策事項となった。しかし、放課後の子ども達にどんな生活の場、居場所を提供し、どのように育んでいくことが望ましいか。さらには放課後の子どもの居場所となるためには、どのような関係性の中で子どもを育んでいくべきなのかという視点から、放課後対策を研究することの今日的意義は大きいものと思われる。なお放課後対策については、諸外国においても、学力低下、格差、少子化の問題解決に向け、放課後という時間に着目して対策を講じている。

そこで、このような放課後児童クラブを「新たな学びの空間」として社会の中に定義し、「新たな学びの空間」に求められる機能や学習環境、カリキュラム、指導方法を明確にする。そのため、今回は、学童期の子をもつ保護者にアンケート調査を実施した。その結果を報告する。

2. 「新たな学びの空間」

本研究において位置づけている「新たな学びの空間」とは、齋藤・吉村他 (2016)¹⁾で示したように、次のように考えている。

将来を担う子どもたちが新しい価値を創造できる人間に育つためには、自ら考え判断し行動する力が必要であり、社会には、そうした精神的に自立した人間を育むための学習空間が求められる。未来の社会の主役である子ども達の想いを大切に、子ども参加型の学習空間づくりを、岐阜女子大学独自の手法「ラーニングプロジェクト」で展開する。

未来の社会の主役となる子ども達には、学校という「教育空間」として、知識・技能を中心に教わる場、また、「生活空間」として、生きることを中心に学ぶ家庭を中心とした場、並びに、「社会空間」として社会性を育む地域という場が存在している。そこに、新

たな学びの空間として、「学習空間」としての「放課後児童クラブ」としての場を創設する。この「新たな学びの空間」とは、主体的に学ぶ児童生徒の、体験的・協働的な空間である。「新たな学びの空間」について図1に示す。

つまり新たな学びの空間では、従来の学びである知識習得型の学びではなく、知識創造型の学びの場とし、自身の経験や活動から互いに伝え合い、学び合う中で、問いを持ち、実感を持った学びを作り出していく学習活動、他者とつながり様々な人と関わる中で生み出されてくる学習活動等の場として考える。また、新たな学びの学習空間では、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」を主に異年齢集団において行う学習プログラムを行う場でもある。例えば、6年生が4年生に教え、5年生はそれを見守るという教え合う場とするのである。

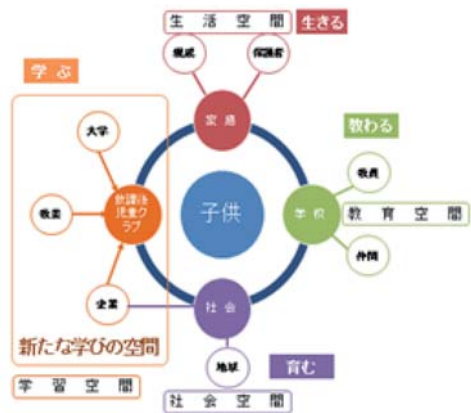


図1 新たな学びの空間

3. ニーズ調査

(1) 調査目的

放課後の子ども達にどんな学びや生活の場、居場所を提供し、どのように育んでいくことが望ましいかを学童期の保護者にニーズ

を調査することにより明らかとすることを目的として本調査を実施した。

(2) 調査対象

岐阜市在住の学童期の子どもを養育する保護者 1,247人

(3) 調査方法

調査対象者の学童が在籍する小学校を通して配付・回収

(4) 調査期間

平成28年12月20日(火)～26日(月)

(5) 調査内容

(6) 回収状況

配付数：1,247件

回収数：849件

有効回答率：68.0%

4. 調査結果

調査の結果を、「新たな学びの空間」にかかわり重要な「機能」、「運営」、「支援員の資質・能力」を中心に述べていく。

回答してくださった方の属性は、母親が94.2% (800人)、父親が3.9% (33人)であった。年代としては、30・40代が中心で、30代が41.2% (350人)、40代が53.4% (453人)であった。子どもの年齢としては、表2のとおりであった。

問11～13の質問に対する結果を図2～4に示す。問11「新たな学びの空間に期待する機能」が図2、問12「新たな学びの空間へ期待する運営」が図3、問13「新たな学びの空間で指導できる人材に重視すべきこと」が図4の結果となった。結果の内容について、次に記述し、その後まとめて図2～4を掲載する。

問11において「新たな学びの空間」に期待する機能を尋ねた(図2)。34項目の考えられるであろう機能を挙げ、それらについて、重視度を「とても重視する」、「やや重視する」、

表1 調査内容一覧

質問番号	質問項目概要
問1	回答者と児童の続柄
問2	回答者の性別
問3	回答者の年代
問4	回答者の住まい
問5-1	世帯構成(子の人数, 年齢)
問5-2	子の面倒をみてくれる人の有無
問6	放課後児童クラブの利用状況(学校の授業日)
問7	放課後児童クラブの利用状況(学校の休業日)
問8	放課後児童クラブ利用希望年齢
問9	民間が運営する放課後児童クラブの利用状況(学校の授業日)
問10	放課後児童クラブの実施場所への思い
問11	「新たな学びの空間」へ期待する機能
問12	「新たな学びの空間」へ期待する運営
問13	「新たな学びの空間」で指導できる人材(専門職)の資質・能力
問14	「新たな学びの空間」で指導できる人材(専門職)に必要な資格
問15	子どもの放課後を保障する必要性
問16	「新たな学びの空間」の必要性・希望

表2 子どもの年齢

年齢	人数
1. 0歳～3歳未満の子	75人
2. 小学校就学前の子(3・4・5歳)	271人
3. 小学生 1～3年生	544人
4. 小学生 4～6年生	567人
5. 中学生	222人
6. 高校生	103人
7. 大学生	12人
8. その他	23人

「あまり重視しない」、「重視しない」の4件法で尋ねた。

最も多く重視されていたことは、「安全に過ごせる環境づくり」であり、96.5% (819件)であった。次いで、「心穏やかに安心して過ごせる環境づくり」が95.4% (810件)であった。

また、学習面への充実もうかがえる結果となった。「宿題・自主学習などの指導」の重視度は91.2% (775件)、「読み書き計算等の基礎基本の反復学習」が81.6% (693件)の重視度であった。

さらに、重視していることとして、基本的な生活習慣やマナー・躰にかかわることが重視されていることが明らかとなった。「友達づきあい等の人間関係の指導」、「礼儀やマナー等のしつけの指導」、「手洗い等の健康安全・衛生面の指導」、「挨拶や片付けなど、基本的な生活習慣に関わる指導」は、どれも90%を超える重視度があった。

家庭における基本的な躰や生活習慣の確立への指導も、放課後等時間に指導されることを望んでいると同時に、学習面においても、学習習慣や基礎的な学習に関することの指導を望んでいることが分かる。そして、その基盤として、児童の心身の安全が保障されることが必要であることが分かった。

問12では「新たな学びの空間」へ期待する運営を尋ねた(図3)。そこでは、「保護者との情報交流」を80.8% (686件)が望んでいる。子どもを放課後に放課後児童クラブに預けるが、ただ預けるだけにするのではなく、情報交流をすることによりその時の様子を知りたいという希望や、放課後の過ごし方の要望などを行っていきたいという気持ちの表れではないかと推察できる。

また、学校教員との情報交流の重視度も高く、83.6% (710件)が重視すると回答して

いる。これはつまり、学校と放課後は一体であり、子どもの過ごす一日の中に区別はなく、分断なく子どもの教育をしてほしいという保護者の気持ちの表れであると考えることができる。子どもの一日を連続的に指導・支援していくことが望まれているものと考えられる。

さらには、学校が長期休暇の時の預かりへの希望が80.7% (685件)と多く、保護者が働くことを考えると、夏休みや春休みといった子どもの長期休暇中には、子どもを指導・支援し、預かってくれる放課後児童クラブへのニーズは高いものと考えられる。

その放課後児童クラブの運営母体については、現在は、岐阜市においては小学校と行政が連携して運営をしているが、今後は、その2者のみではなく、小学校・地域・企業・行政等との共同運営への期待が高く、68.7% (584件)であった。この運営には、地域人材の一環である、大学も含まれるものと考えており、1つの母体が運営するだけでなく、様々な観点や人材活用から運営できるよう、多様な機関との共同運営が望まれるものであると推察する。

問13では「新たな学びの空間」で指導できる人材に重視すべきことを尋ねた(図4)。人材に求める資質・能力としては、「子どもたちの安全な環境を整えることができる」、「子どもの心のケアができる」が93.9% (797件)と最も重視されていた。やはり、子どもの安全・安心を最も重視しており、それができる人材が求められていることが明らかとなった。

しかしながら、そればかりではなく、「子どもが「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を感じ意欲を引き出す学習指導ができる」と「子どもたちの興味・関心に合わせて学習指導ができる」の重視度も高く、90.9% (772件)で

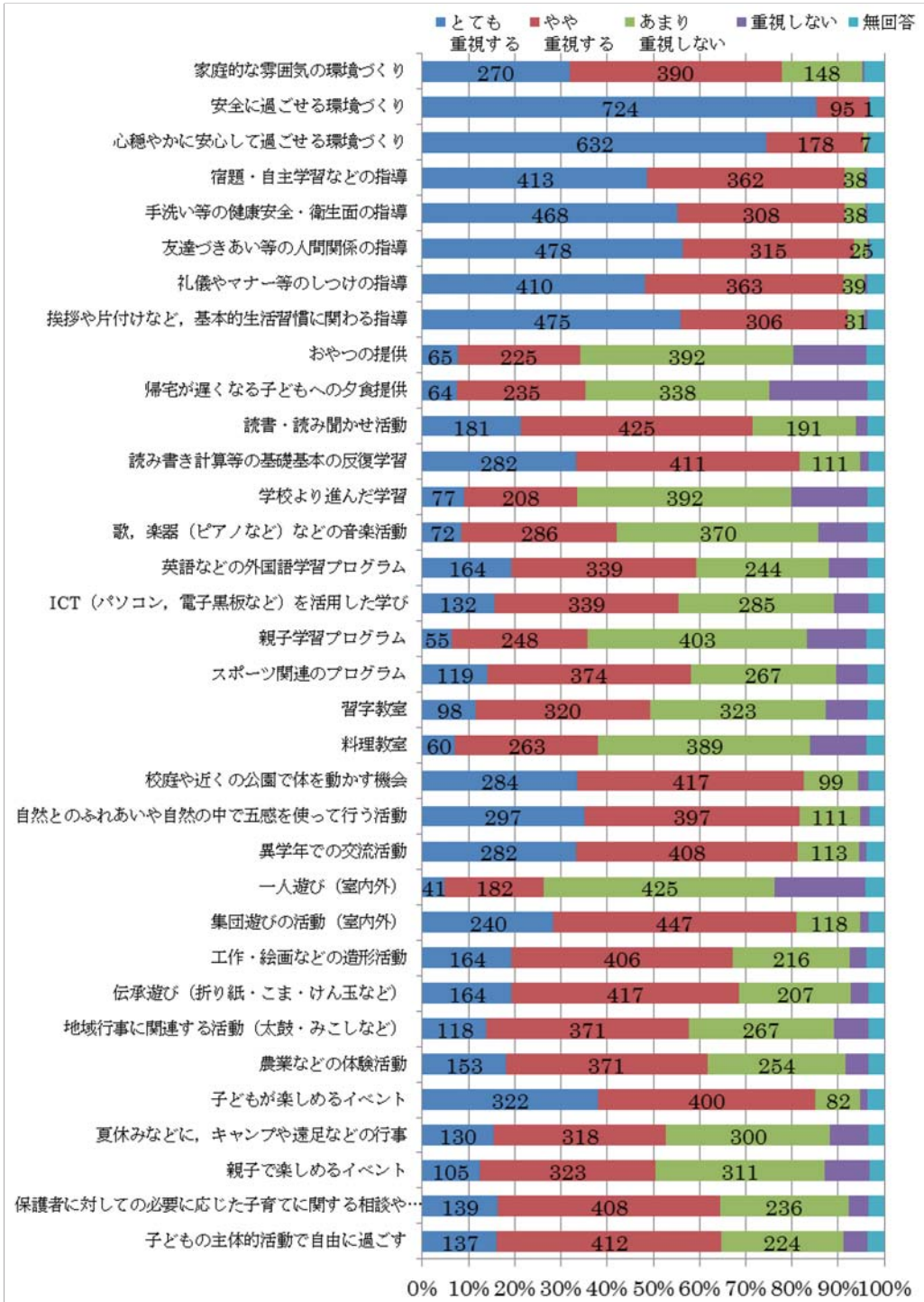


図2 「新たな学びの空間」へ期待する機能

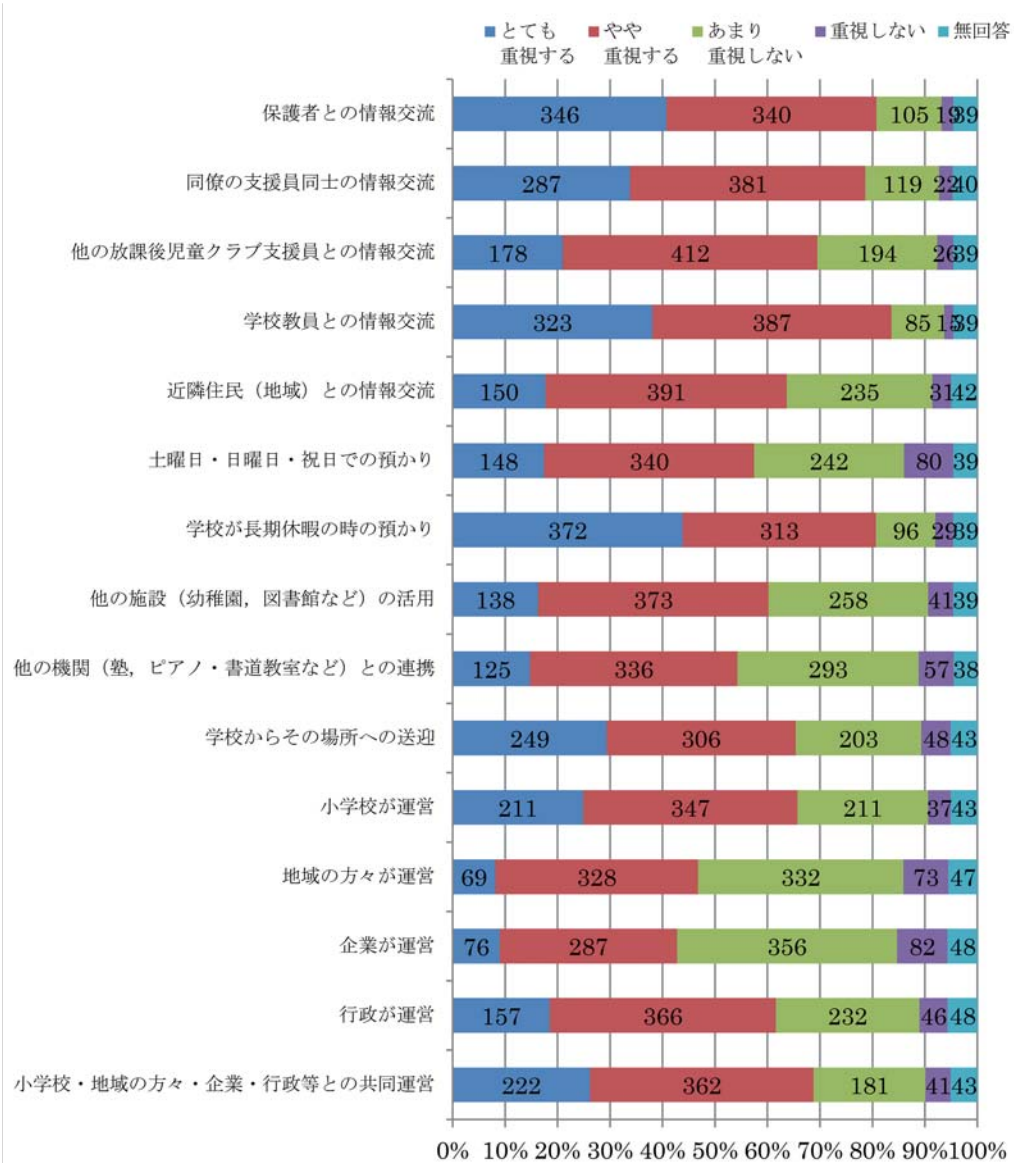


図3 「新たな学びの空間」へ期待する運営

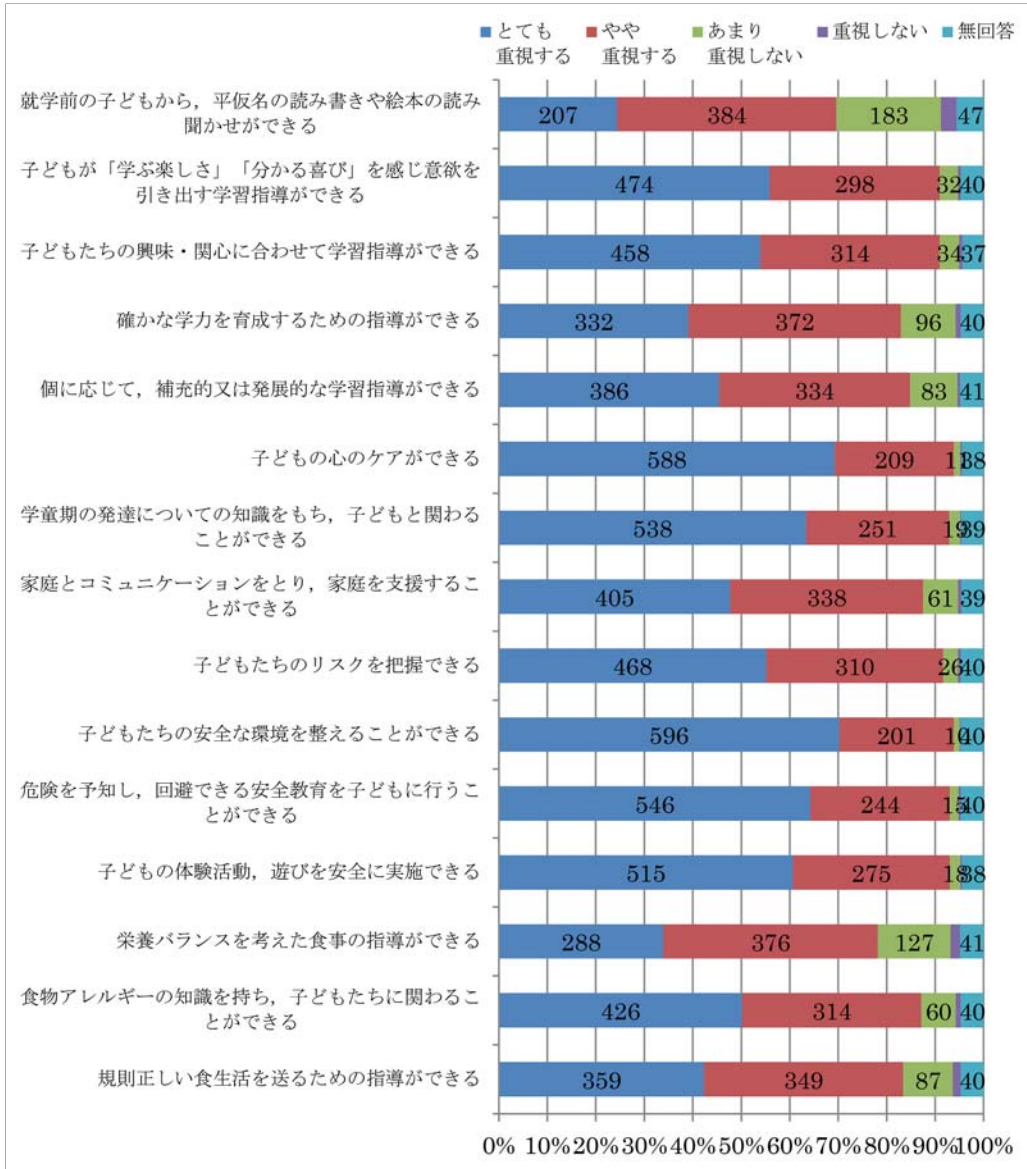


図4 「新たな学びの空間」で指導できる人材に重視すべきこと

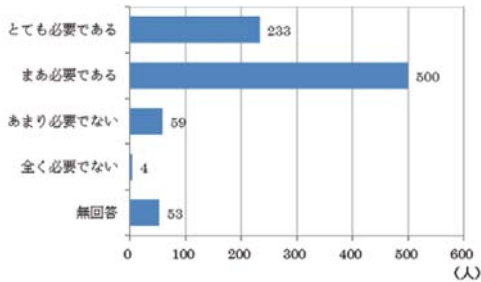


図5 「新たな学びの空間」の必要性

あった。つまり、学習面への指導ができる資質・能力も求められているのである。

さらに、問15において、子どもの一日の場を保障する場として「新たな学びの空間」を位置付けることが必要かどうかについて尋ねた。その結果、86.3% (733件)が必要であるとしている (図5)。

5. おわりに

子どもが放課後を過ごす場所として現在位置づいている、放課後児童クラブを「新たな学びの空間」として社会の中に定義し、「新たな学びの空間」に求められる機能や学習環境、養成カリキュラム、指導方法を明確にするために、調査を実施し、その調査結果を述べてきた。これらのことから、以下のことが明らかとなった。

- 子ども達が安全に安心して過ごすことができる環境整備
- 一人一人の興味・関心に応じた、多様な学びを行う
- 学びには、一人一人の子どもが自ら課題を持ち「主体的・対話的な深い学び」や、楽器・スポーツなどの「一人一人の個に応じた学び」、野外での「実践的で体験的な学び」が必要

○これらの学びを指導できる専門職が求められている

この結果より、今後、放課後児童クラブを「新たな学びの空間」として位置付けるために、次のことが求められるものとする。

- 放課後児童クラブを新たな学習環境に求められている構成要件を取り入れ「新たな学びの空間」として位置付け、現在の放課後児童クラブの在り方を変革していくことが必要
- 新たな学びの空間」で働く専門職の育成が急務

これらの明らかになった現状、課題より、「新たな学びの空間」としての在り方を今後さらに検討していく。その中で、保護者のみに留まらず、社会からのニーズは、「新たな学びの空間」を望んでいるのか明らかにしていきたい。

謝辞

本活動にあたり、ダイバーシティ研究環境イニシアティブにおける代表機関の岐阜大学の関係教職員の方々、本学ダイバーシティ推進委員の皆様、初等教育学専攻の先生方には多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

※本研究は平成27年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境イニシアティブ (連携型)」平成28年度連携型共同研究の助成により行ったものであることを付記し、ここに感謝の意を表します。併せて関係の皆さまへ感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 齋藤陽子・吉村希至・森洋子・松本香奈位田
かづ代・土井のぞみ・佐々木恵理子 (2016).

子どもたちの「新たな学びの空間」の在り方
に関する試行的研究—夏休みにおける試行的
実践—岐阜女子大学紀要46号

